

社会人類学のフィールドに立つ

—沖縄北部巡検記

高井 美緒

2025年5月末、沖縄への巡検に参加してみないか、と先輩の大島崇彰氏に声をかけられた。まだ入学して1ヶ月ほどしか経っていない時期に、このような機会に恵まれるとは全く思っていなかった。これまで、人類学者とともにフィールドワークをしたことがなかったため、またとない機会だと思って、ぜひ、と強く返事をした。

2025年9月9日から14日にかけて、指導教員の深山直子教授、大学院の先輩である大島崇彰氏、松岡竜大氏と共に、私ははじめて沖縄へと赴いた。今回はあくまでも人類学的調査ではなく、北部を中心に将来の調査のために見て回る巡検、という位置付けだった。それでも、修士課程から社会人類学を学ぶ私にとって、人類学者のフィールドワークを経験できると期待に胸を膨らませ、また同時に、少し緊張もしていた。

今回の巡検の拠点となったのは、沖縄県本島北端に位置する、那覇から車で約2時間の距離にある国頭村である。その中の一集落を中心に、国頭村の北部でフィールドワークを行った。巡検前に、村史などの資料などから勉強会を行った際、拠点となる集落では、村墓という共同墓があることを知り、巡検では、それぞれの関心とは別に、村墓についてはみんな考えてみよう、ということになった。また、共同売店についても面白そう、ということで、4日間の中で情報を集めてみることになった。

私は学部時代より、公衆衛生や医療格差といったテーマに関心を寄せてきた。そこで、巡検前には、病院に行くにも買い物に行くにも遠いこの北部集落において、一般診療や救急医療がどのように機能しているのか、また人々がどのように生活を維持しているのかに関心があった。しかし、実際に北部集落を訪れ、住民の方とお話し、それぞれの集落をめぐる中で、関心は高齢化と過疎化の進む集落で新しく興るビジネスへと移っていった。

初日、現地協力者に挨拶へ行き、夜ご飯をご馳走になった際、私たちは集落に関して話を伺った。話題は主に村墓に関する事だったが、住民が共同で出資・運営する共同売店や、集落にある小規模ホテルについても、興味深い話を聞いた。今回の巡検における現地協力者の住む集落では、かつて、共同売店として使用されていた建物を事務所として改装し、空き

地に宿泊棟を建てたホテルがあることがわかった。ホテルの従業員たちは、集落にホテルを建てるための住民の理解や協力を得るために、集落に広く顔が効く協力者夫婦とのコミュニケーションを大事にしているようだった。就業時間中にも、頻繁に協力者夫妻のところに顔を出しに來たり、お茶をしたりと関係を築いているという話だった。また、高齢化により、実施が難しくなっている七月舞（しちぐわちもーい）などの年中行事にも、従業員が踊り手として参加してくれていることによって、何とか続けることができているとも話していた（写真 1）。

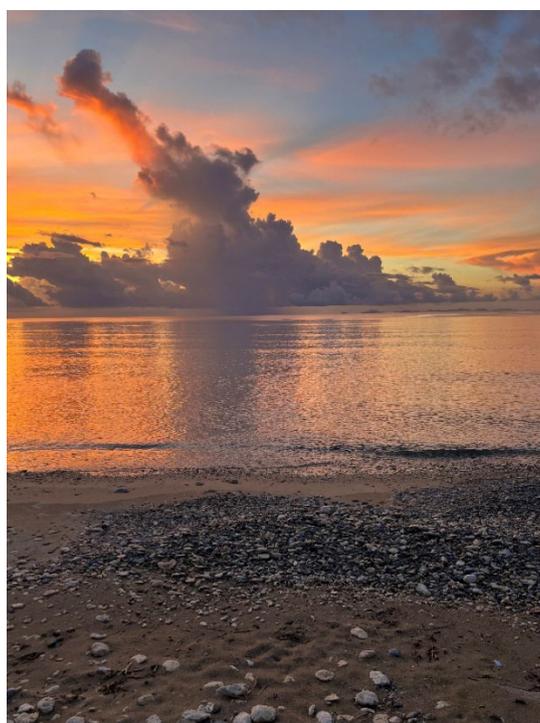


写真 1 集落から見た夕焼け（2025 年 9 月 11 日、筆者撮影）

翌々日、協力者の案内で、村墓や集落内の御嶽、水場などを順に回っていた際、ホテルの宿泊棟の横を通りすぎた。宿泊棟は、集落の中にひっそりと存在していた。高い垣で囲われており、平屋で、遠くからでは他の民家と変わらない雰囲気だが、近くを通ると建物は新しく現代的なつくりになっていることがわかる。また、祭事で使われる広場の近くを案内してもらっていたところ、ホテル関係者一行とすれ違った。なにやら、集落の中を団体に案内している様子だった。

ホテルの従業員とみられる女性が協力者に声をかけ、軽く挨拶を交わす様子がみられた。協力者によると、私たちが案内を受けた御嶽や水場は、集落の人々にとって神聖な場所であ

るため、ホテル関係者の人は立ち寄らないのだそうだ。また、ホテルの宿泊者にも、ホテル従業員が集落内を案内することがあるそうだが、その際にも、くれぐれも立ち入らないように、と伝えているのだという。

集落内をぐるりと一周し、集落の中心に戻ると、ホテルの事務所から先ほどの従業員の女性が、にこやかに協力者のもとに駆け寄って、他愛もない会話を二、三かわしていた。従業員は、私たち一行が何者なのか訝しがっているように見えたが、協力者と知り合いであると知るとふっと雰囲気が変わり、いろいろと話してくれた。

ホテルのパンフレットやホームページを見てみると、観光資源を持続的に活用していくこと、地域活性化に一役買うようなホテル運営を目指すこと、地域のリアルな信仰や文化、食、自然についての体験を宿泊客に提供すること、などが掲げられている。協力者も、ホテルの創設者や従業員は、そのような理念に基づいて取り組んでいる、と好意的に語っていた（写真2）。



写真2 海から見た拠点集落の山（2025年9月13日、筆者撮影）

協力者の案内で集落内を歩いただけでも、住民の様子や関係性がさまざまみることできて興味深かった。とくに、ホテルがあることによって国内外から人々がやってくることによる経済効果や、高齢化にある集落のこれまでの祭事を継続するためにホテル関係者が関

わっていることを歓迎するような住民もいる一方で、それに対して複雑な思いを抱いている住民もいるようだった。

また、私たちが拠点集落だけでなく、他の集落を同様に散策していると、我々の様子を見つめる現地住民の姿があった。普段は静かな集落で、外からやってくる人は珍しいということなのであろうか。協力者の姿を見たり、協力者の名前を出したりすると、少し安心した様子であった。巡検を通して、このような緊張を目の当たりにするたび、現地協力者の存在の大きさを実感した。協力者がいなければ、立ち入ることができなかった場所、聞くことができなかった話がたくさんあり、このように充実したフィールドワークを行うこともできなかったと思う。

巡検中、どのような医療が行われているかに関しても、興味深い取り組みや出来事と出会うことはあった。しかし、フィールドに入ったことで、それ以上に心惹かれる事象との出会いがあった。たくさんの情報にとめどなく晒され続け、全てをノートに書き留めたいと思っても、なかなか手が追いつかなかった。目の前の風景、話をしてくれる人々と向き合いながら、ノートに書きつけることは難しかった。

すべてを捉えることはできなくても、ひとつでも多くの情報を記録したつもりで帰ってきて、それらを振り返る作業の中で取りこぼしてしまった情報に気づき、自分のやり方の甘さを悔いた。はじめての人類学的フィールドワークでは、反省の方が多い。現にこうして、エッセイとしてまとめている今も、まとまりのない文章と、巡検で得たことをうまく構成するテクニックのなさを突きつけられ、不勉強を恥じるばかりである。

それでも、フィールドで出会った人々、風景、すべてが私にとっては新鮮で、また機会があれば訪れたい、今度はもっと良いフィールドワークをするのだ、とりベンジに燃えている自分もいる。今回の巡検では、私はフィールドワークの醍醐味を学んだ。次の機会には、より理論なども深く学び、今回の巡検よりも成長したフィールドワークを行いたい。

(たかい・みお 東京都立大学大学院)